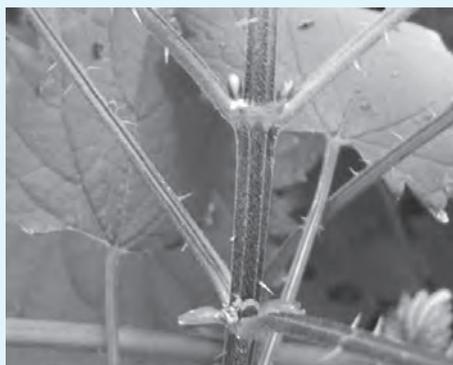


イラクサはいらない草？

3年前のコレンジャーの活動で「人と野生動物が利用する森」を整備しました。そこでは、人が利用する場であると同時に人里に近い森に暮らすタヌキなどの場にもなるように、森の散策路をつくり、そこに自生していた冬に実をつけるフユイチゴやリュウノヒゲは、移植して動物のレストランを作りました。

今年の8月、その場所の管理でコレンジャーと草抜きをしていた時のことです。「イラクサはトゲがあって刺さるとすごく痛いから、かせちゃんが抜くからね。イラクサの葉っぱはこれだよ。」という説明をした矢先、コレンジャーの子が「大丈夫だよ。僕がやるよ!」と言ったと同時に「イターッ」という声が響きました。応急処置で痛みも和らいだ様でしたが、「イラクサはいらない草で、刺されるとイライラするからイラクサっていう名前なんだよ。」とトゲが刺さった子どもが言いました。「どうしてイラクサという名前が付いたのか、みんなで調べてみようか。」と言うと、一同大盛り上がりで図鑑を開きましたが、名前の由来は残念ながら載っていませんでした。

後日、イラクサについて調べてみると、イラクサのイラクは刺のことで刺草と書き、秋田県ではミヤマイラクサをアイコ（アイヌ語でアイは刺でコは愛称）と呼んで親しんでいます。イラクサはカルシウム、マグネシウム、カリ



イラクサの刺は動物の攻撃から身を守る役割があります

ウム、リン、鉄などが含まれ、山菜として食べられており、茎からは、なめらかで白い色合いを持った繊維が採れたことから、アイヌ民族はイラクサで織った布や着物を大切にしていたようです。また、海外では昔、ローマ兵が寒さでかじかんた手を刺で刺激させたという話が残っていたり、葉は煎じてじんましんやリウマチの薬に、干し草や種子を家畜の飼料にしたりと、人が暮らす上で昔から価値のある草でした。森ではシカだけではなくアカタテハなどの野生動物にも必要な草でした。

9月の活動では、調べて分かったことを子どもたちに報告し、子どもの「はてな」が私のイラクサ＝雑草という意識を変えるきっかけになったと感謝しました。来春、刺に気をつけながら若葉を収穫して食べてみようと思います。「はてな」は新たな発見につながりますね。

(加瀬澤)